慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦前版『幸徳秋水全集』考：「幻の全集」の成り立ちと全体像
Sub Title	Study of "The complete works of Shusui Kotoku : pre-war version"
Author	小松, 隆二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1986
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.79, No.2 (1986. 6) ,p.183(53)- 197(67)
JaLC DOI	10.14991/001.19860601-0053
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19860601-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦前版『幸徳秋水全集』考

——「幻の全集」の成り立ちと全体像——

小松隆二

はじめに

第二次世界大戦前に全6巻からなる『幸徳秋水全集』(正確には『幸徳伝次郎全集』)が刊行されていることを知る人は，意外に少ない。もちろん，それには理由がないわけではない。その理由の一つは，同全集が稀覯本，さらには「幻の全集」に近い残存状況になっていることであろう。実際に，その揃いは，現在国会図書館にも，全国の主要な大学図書館にも所蔵されていない。また古書店の目録でも，よほどの幸運にでも巡りあわない限り目にすることはできない。(1)

もっとも，戦前には幸徳秋水全集を銘打って世に送り出されたものは，1種類だけではない。後述するように3種類でている。この事実さえあまり知られていない。それほどに，全揃いともなればどの全集も超稀覯本の部類に属している。

その全集が世に送り出されるのは，国権重視の明治の殻を抜け出し，民衆や労働者，そしてその個性や個を重視する視点に支えられる大正デモクラシーがほぼ終焉せんとしていたときである。秋水は，もっとも反逆的な反権力の視点に立ったが故に，明治国家に圧殺されたのであったが，その明治の時代相を克服しようとした大正デモクラシーの最盛期にではなく，むしろ終焉期に，彼の著作が再生するのである。恐慌と弾圧のすすむ1930年から1931年にかけてのことである。

本稿は，そのような戦前版『幸徳秋水全集』について，その成立事情，背景，内容，意義等を明らかにすることを目的にしている。近年，幸徳秋水をふくむ初期社会主義研究はとみに緻密さや深さを増しつつあるが，なお不十分な点も少なくない。それは，このような初期社会主義期の代表的人物である秋水の全集といった基本文献の確認さえ，これまできちんとなされていなかったことにも如実に示されている。

注(1) 全6巻揃いの残存状況は，正確には不明である。上記の通り国会図書館，法政大学大原社会問題研究所，日本近代文学館をはじめ，全国の主要図書館を調査してみたところ，所蔵しているところはなかった。これまで筆者が確認できたのは，6冊揃いが1つ，5冊の不完全揃いが1つのみである。おそらく全国でも5指に満たない残存状況ではないかと推測される。

以下に，長い間空白のままであった戦前版『幸徳秋水全集』について，その周辺の事情もふくめ，全体像を明らかにすることにしたい。

1　戦前と戦後の『幸徳秋水全集』

幸徳秋水全集ないしは著作集ということで，一般的に誰もがすぐに念頭に浮かべるのは，戦後刊行された『幸徳秋水全集』と『幸徳秋水選集』であろう。(2)

前者の『全集』は，1968年から73年にかけて明治文献から刊行された。本巻9，別巻2，補巻1の全12巻からなり，若干の漏れや誤りはあるが，決定版といってよい。編者は大河内一男，森長英三郎，糸屋寿雄，宮川寅雄，塩田庄兵衛，大原慧，川村善二郎，小松隆二の8名。その後，明治文献の後継出版社といってよい明治文献資料刊行会の手で，同全集は1982年に復刻再刊されている。

後者の『選集』は，戦後まもない1948年から50年にかけて世界評論社から刊行された。全3巻で，編者は平野義太郎であった。

なお「幸徳秋水集」の名のつくものは，戦後にいたると各種の文学・思想全集類にも収録されるので，決して少なくはない。「近代日本思想大系」（筑摩書房）の『幸徳秋水集』（1975年），「日本の名著」（中央公論社）の『幸徳秋水集』（1970年）などがそれである。

これらの戦後刊行された幸徳秋水の全集や各種の選集は研究者のみか，一般にもよく知られている。それに対し，戦前刊行された秋水全集はきわめて少数のものにしか知られていない。その少数

写真①　戦前版『秋水全集』

者が戦前版『幸徳秋水全集』ということで通常念頭に浮かべるのは，1930年から翌31年にかけて，山崎今朝弥らの手で解放社から刊行された全6巻からなる黒表紙のそれである（写真①参照）。

注（2）幸徳秋水の著訳書および参考文献については，大野みち代『幸徳秋水――人物書誌大系3――』（日外アソシエーツ，1982年）を参照されたい。

同全集は，四六判，各巻平均200頁（166～251頁）。定価は各巻とも50銭（全巻で2円50銭の特価）。表紙は白地に黒を広く配し，その白と黒に朱線を効果的に使っている。第一印象では，表紙は黒色と受けとめられる調子になっている。そこに「幸徳伝次郎全集」のほか，各巻のタイトルと「天下第一　不孝の児」の文字が刷りこまれている。もっとも背表紙は，たんなる「幸徳伝次郎全集」ではなく，赤地に黒く「秋水幸徳伝次郎遺文全集」の文字が浮き彫りにされている。この全集こそ，バラには時たまお目にかかることはできても，全巻揃いではめったにお目にかかることができない戦前版の「幻の秋水全集」である。

2　幸徳秋水集の企て

戦前版『幸徳秋水全集』は，1930年にいたってはじめてオリジナルに企画・出版されたものではない。予約募集の広告までされ，共通の黒表紙に外見も統一される全集6巻にまとめられるまでには，幾多の変遷がたどられる。たとえば，雑誌（『解放』[3]）や群書（双書）の特集としていったん一冊ずつ世に送り出されたものを，まず雑誌型と群書型の全集に各々仕立てて発売する。その後に改めてそれらを製本しなおし，表紙も黒表紙に替えて，はじめて全集らしい装いと形式をととのえて再発売する。こういった手順をふんでようやく全集刊行にこぎつけるにいたるのである。

このような通常の全集刊行とは異質な方法をとるにいたったのには，当時の時代状況とその発行人である山崎今朝弥の特異な個性を抜きにしては理解することができない。

山崎今朝弥（1877-1954）については[4]，すでに伝記もあり，また回想記も少なくない。彼は，弁護士としての活動のほか，社会的諸活動への参加やその一環としての多様な出版活動など，きわめて広範な活動に関与した。権力による圧迫事例に出あおうものなら，頼まれもしないのに，勝手に訴訟を起こすほどの反権力の姿勢を守るとともに，米国伯爵を名のったり，出版でも今日とは異なる事情もあって雑誌などは在庫がでれば，表紙を替え，時にはタイトルを変えて繰り返し世に送り出したり，〈変態雑誌〉，〈正月特別廉価号〉などと人をくったような宣伝文を平気で表紙に刷り込んだりして，歪んだ社会における普通さや常識への巧みな皮肉や挑戦も数限りなく行っている。

それらの中でも主要な活動の一つであった出版活動に，「解放もの」といわれる一連の活動がある。大正デモクラシー期に大きな役割を果たした大鐙閣・解放社版の第一次『解放』（赤松克麿，宮崎龍介，麻生久，佐野学，山名義鶴らが編集に参加）を引き継ぐ第二次『解放』とその関連活動である。通常の『解放』のほか，四六判『解放』（『小解放』），『解放科学』，『解放パンフ』，『変態解放』とい

注（3）『解放』については，第1次および第2次『解放』の総目次，索引，解説を収録した小田切進編『「解放」総目次・執筆者索引』（八本書店，1985年）はじめ，次の文献を参照されたい。竹盛天雄「解放」『文学』1957年10月，小田切進編『現代日本文芸総覧・補巻』明治文献，1973年。

（4）山崎今朝弥の伝記としては，森長英三郎『山崎今朝弥』（紀伊国屋書店，1972年）がある。

った雑誌，それに単行本シリーズの「解放群書」の刊行である。幸徳秋水全集はこの『解放』と群書と密接な関わりをもって，というよりこの二つを基にして世に送り出されたものである。

当時，秋水の著作を部分的にであれ，公刊することは，きわめてむずかしい状況にあった。大逆事件からそれほど歳月が経っていないこと，また関東大震災後，朴烈・金子文子らの大逆事件，難波大助の虎ノ門事件，大杉栄らの虐殺に抗議する和田久太郎らによる復讐事件，中浜哲，古田大次郎らのギロチン社事件，古河三樹松，池田寅三らの陸軍大将くそくらえ事件と，当局の弾圧を呼ぶ事件が続いていたこともあり，社会主義者ならずとも出版にのりだすことには二の足を踏まざるをえない状況であった。新居格など秋水の著作刊行を考えたものは少なくないが，いずれも実現にはいたらなかった。この点は，山崎が次ぎのように回想する通りである（「発刊之辞」四六判『解放』1926年創刊号）。

「色々の人々が様々の方法で其発行を企て，色々の故障様々の理由で何時も中止となるのが幸徳秋水文集である。秋水随筆集は数年前？に随筆社？（当時）の新居格君に依て企てられ同じく中止となってゐた。」

そんな状況であればこそ，反逆精神旺盛な山崎は，秋水の著作の刊行に執念を燃やした。もちろん山崎とて，和田，古田らの弁護活動を引き受けた後でもあり，困難な状況をよく承知しているので，後先も考えずにただ闇雲にすすむというようなことはしなかった。実行するまでには時間の経過とタイミングをはかることを彼なりに考慮している。売行き・採算の方はそれほど心配する必要はなかったであろうが，当局の検閲・発禁をくぐりぬけることを考えなくてはならなかったからである。刊行しても，発禁でもくらえばそれまでである。まともにやったのでは，その恐れがある。何とか発禁を免れうる時期や方法を考えなくてはならなかったのである。

そのような困難を克服する方法として，まず第一に既刊の秋水の単行本は発禁ものが多いので，それらをはずすこと，第二にその後に比較的安全なものとして残ったものをまとめ，発表することとし，具体的には既存の雑誌やシリーズものを使うことが考えられた。雑誌等なら単行本ほど目立たないし，月々出すルーティンの刊行物を装うことで，当局の注意力を弱める効果もあげることができるであろう。そのために利用されるのが『解放』およびその姉妹誌であった。

たまたま検閲等で最初の秋水文集は刊行が遅れたことで，四六判『解放』の創刊と時期が重なってしまった。その四六判については，山崎が「此秋此際解放社では年来の願望四六解放発刊の機が漸く熟した」（前掲「発刊之辞」）といっているように，随分期待もし，力も入れた。その力を入れた雑誌の第1号に秋水特集を組んだところに，山崎の秋水への思い入れと決意の強さもうかがえる。この辺の配慮は，次の山崎の記述からもある程度推測できるであろう（前掲「発刊之辞」）。

「四六解放は其れ一つで既に一著一円の価値ある一大論文一大創作一大随筆一大資料一大研究等を燦然と独り輝く太陽とする，……秋水随筆を登用して創刊号の太陽とし，自身責任を負ふて

厳閲英断，以て玆に之れを世に問ふ事とした。」

そのような苦心があっただけに，刊行にこぎつけたときの関係者の喜びも一入であった。この全集刊行に協力した岡陽之助は，まだ検閲を通る前であったが，特集第1号の刊行準備を終えたところで，「秋水の文は利刃を以つて称せられ，私共の渇仰舎かざるところ。……私共は久しく……苦心蒐集，此度び漸くにして此の一巻を作り得た。深更，校正刷を読みつつ万感交々至り校正の筆遅々として進まざるを覚えた」（「『秋水随筆集』の校正を了へて」『解放』1926年5月）と記している。この感懐も，そのような刊行までの労苦をよくものがたっているだろう。

3 『解放』と秋水特集 ——全集の試み——

関東大震災によって終刊に追い込まれた『解放』を引き継ぐように，山崎今朝弥が後に第二次と呼ばれる『解放』を刊行するのは，1925年10月のことである。

その『解放』（四六判『解放』）のほか，『解放科学』などの姉妹誌を使って，山崎が幸徳秋水特集を組む最初は，四六判『解放』創刊号（1926年8月）においてである。以後，次の9月号に第2弾を

写真② 『解放』最初の秋水特集

写真③ 解放群書最初の秋水著作集

はなった後，しばらく間をおくものの，あいついで，しかも時には繰り返し秋水特集号を刊行する。それらのうち，判明したもののみを一括列記すると，次の通りである。

① 1926年8月　四六判『解放』創刊号「幸徳秋水文集」。解放群書(7)に収録さる。

② 1926年9月　四六判『解放』2号「幸徳秋水書簡集」。解放群書(8)に収録さる。

③ 1928年2月　『小解放』「2月幸徳秋水全集号」「幸徳秋水文集」。

④ 1929年1月　「新年正月特集号」「幸徳秋水評論文集」。解放群書(32)に収録さる。

⑤ 1929年（発行月不明）「幸徳秋水茶説集」。目次では「幸徳いろは庵茶説集」となっている。解放群書(37)に収録さる。

⑥ 1929年9月　「問題の幸徳秋水文芸号」「幸徳全集中文芸及文芸論集」。目次では「幸徳秋水文芸集」となっている。解放群書(36)に収録さる。

⑦ 1929年11月　「幸徳全集完結号」「幸徳秋水思想論集」。解放群書(38)に収録さる。

⑧ 1930年1月　『解放科学』「幸徳秋水解放論集」。目次では「秋水評論集」となっている。

⑨ 1930年6月　『解放科学』「幸徳秋水選文芸随筆集」。目次では「幸徳秋水文芸論集」となっている。

⑩ 1930年7月　『解放科学』「天下絶品　団々珍聞」。目次では「幸徳いろは庵茶説集」となっている。

⑪ 1931年6月　「幸徳秋水文集号」。目次では「幸徳いろは庵茶説集」となっている。

（他に山崎の刊行した『解放パンフ』や『労農運動』といった雑誌にも，『解放』で発表済みの秋水特集が表紙だけ換えてそのまま再録されている。）

これらのあいつぐ特集の刊行をみるときに，注意すべきことは，『解放』の秋水特集が山崎の思い付きで体系もなく，バラバラに刊行されたのではなかったという点である。刊行年月の間隔や同じ特集の繰り返しをみると，一見体系性や一貫性があいまいのまま刊行されたように見えるが，実はそうではなかったのである。たとえば，まず発禁を免れるべく内容に配慮し，無難な「文集」から取り組んでいること，さらに何よりも山崎は最初から秋水の著作をシリーズとして取り組む考えであったこともうかがえる。

山崎が最初から秋水特集を著作集や全集といったシリーズ的なものとして考えていたことは，いくつかの点からもうかがえる。たとえば秋水特集としては最初のものである四六判『解放』創刊号と第2号（1926年9月）をみても，それらが当初から全集の一環として取り組まれていること，にもかかわらず，現実にはただちにはその実現は無理なので，まずは『故幸徳秋水文集』2巻揃いとして取り組まれていることが明らかである。

この最初の秋水特集は，当初『幸徳秋水随筆集』のタイトルで解放群書の単行本として刊行される予定であった。その刊行に先だって，解放社は予約募集を行うが，その予約は「秋水全集予約募集」という広告，すなわち紛れもなく「秋水全集」を前面に押し出す広告でなされる（以後も広告は「伝次郎全集」ではなく，「秋水全集」でなされる）。『解放』1926年5月号で「まだ二百位は予約注文に応じられるが6月迄には必らず満員で御断りの外あるまいと思ふ」といっているのも，〈全集〉の予約のことである。これは，まだ最初の秋水特集号である『文集』が刊行される前に行われたことで，この点からも当初から『文集』を全集構想でとらえていたことがうかがえる。また，その後しばらく間をおいていよいよ秋水特集に本格的に取り組む契機となる1928年2月号『解放』（『小解放』）では，広告のみでなく，表紙にまで「幸徳秋水全集号」として「全集」の文字を使い，全集刊行の具体化にのりだす姿勢を示している。しかもこの号では，解放群書の(7)(8)に入っている『文集』と

『書簡集』の広告のみでなく，別個に『幸徳全集第1編・短名文集』と『幸徳全集第2編・書簡文集』の広告も出され，〈全集〉として取り組む方向がはっきり示されている。

これらのことからも，山崎が最初から全集のようなシリーズ的構想をもって秋水特集に取り組んでいたという先の指摘は，了解されるであろう。

このように山崎による秋水特集の最初のまとまったものは，『幸徳秋水文集』2巻であったが，それは明らかに全集構想の一環として刊行されたものであった。この2巻で自信を得てはじめて6巻にまで幅を広げ，質量ともに全集とよんでおかしくないところまですすんでいくのである。

4 『幸徳秋水文集』2巻の刊行

四六判『解放』創刊号（1926年8月）の特集「幸徳秋水文集」および翌9月号の特集「幸徳秋水書簡集」は，雑誌発行と同時に『幸徳秋水文集』2巻揃いとしても世に送り出される。解放群書(7)(8)として表紙など外見だけを変えて刊行されるものである（写真②③を参照のこと）。

もともとこの二つの特集は，前述の通り『随筆集』と『書簡集』として，全集構想の下で解放群書シリーズに入れる予定であった。実際に，当初はもっと早く1926年の春には，まず『随筆集』を群書の(3)として刊行する予定であった。しかるに検閲で時間を要して，ひと月，またひと月と刊行が遅れた。そうこうするうちに，8月の四六判『解放』の創刊にまで持ち越され，その創刊号および解放群書の(7)に『幸徳秋水文集』として同時に収められることになったものである。

このように6巻の『幸徳秋水全集』に先行して，『幸徳秋水文集』が秋水のまとまった著作集としては最初に世に送り出される。全集構想の下での取り組みではあったが，まずは2冊の著作集として出発した。この二冊揃いの『文集』は，雑誌全集および群書全集，さらに黒表紙全集が刊行されてからも併行して宣伝・販売されつづける。その辺もいかにも山崎らしい姿勢といえよう。

その『文集』第1巻は，四六判165頁。広告では『随筆集』や『短文集』ともされているが，実際には『幸徳秋水文集』として刊行されている。内容は四六判『解放』創刊号と同じ。ただし四六判『解放』そのものではなく，そこから秋水以外のものによる諸論稿（「発刊之辞」「編集後記」，それに「秋水文集前座」とされた新居格らの論稿）は削除されて，秋水のもののみで1冊となっている。

『文集』第2巻は，四六判191頁。『書簡集』である。内容は四六判『解放』と同じ。

なおこの2冊が収められる解放群書は，出版活動を重視し，単行本刊行にも意欲を示していた山崎の念願が実り，具体化されたものである。新居格の創作集『月夜の喫煙』（1926年）を第(1)号として，平均月2冊刊行される名著シリーズである。『秋水随筆集』も群書創刊時の目玉の一つであったが[(5)]，結局予定よりだいぶおくれた刊行となる。このシリーズには『解放』の特集をそのまま転

注（5） 先に引用した「発刊之辞」でも，山崎は「本年2月解放社が本邦唯一の群書発行を企んだ時コレハどうかと持込んだ」といっているように，群書創刊時から秋水の著作集を発行する機会を狙っていたことがうかがえる。

用する例が多いが，1928年以降あいついで刊行される『解放』の秋水特集号も，後にすべてこの解放群書シリーズに収録される。群書(32)に『評論集』，(36)に『文芸集』，(37)に『茶文集』，(38)に『論文集』が入り，かつこれらが群書全集としてまとめられる。これらは，『月夜の喫煙』と並んで群書シリーズではもっともよく売れる一つになっていく。

5　雑誌全集と群書全集の刊行

先に戦前には『幸徳秋水全集』と銘打たれたものは，3種類あると記した。そしていずれも『解放』と解放群書シリーズに関係があることも記した。

山崎今朝弥が『幸徳秋水全集』の構想を描き始めるのは比較的早い時期であったが，一歩前進させてその構想を全6巻として具体化させるのは，昭和に入ってから，それも1928年から29年にかけてであろう。四六判『解放』の創刊当時は全集を出したくも，全集はもちろん，1冊でもまともに刊行できるかどうか危ぶまれた。それでも，一応全集発行のアドバルーンをあげて予約を募集し，同時に当局と検閲の方を交渉する。全集といっても，まだ全体系の見通しもないので，ともかく1冊ずつ出してみる。うまく2冊にでもなったら大成功という程度の見通しであっただろう。そこでまず四六判『解放』創刊号と第2号に続けて特集をし，同時に解放群書にもその2冊を収めて『幸徳秋水文集』全2巻とした。

ところが意外にも，当局による圧迫とそれによる犠牲は軽微なものですんだ。この『文集』に入った最初の秋水特集2冊は検閲段階ではいったん発禁扱いであったものの，改訂して刊行することで事なきをえた。その結果，むしろ以後お墨つきを上から頂戴したことで，公然と秋水の著作集を世に広めることができるようになる。その上，読者にも評判がよく，広くうけいれられる。1年もたたぬうちに2巻とも5版を重ね，普及版も刊行されるほどの売行きであった。

このような種まき作業の後，もう少し広げても大丈夫そうという自信を得て1928年，とくに29年以降次々と「解放もの」の特集号として秋水遺文を刊行しつづける。しかもこの段階になると，はっきりと全集を目ざすもくろみの下で1冊1冊刊行されることになる。

ただ当初から『解放』の秋水特集号の刊行を6冊までとする計画であったかどうか，その結果全集も6冊とする計画であったかどうかははっきりしない。活字でみるかぎり全6巻の広告が『解放』等にのるのは，1929年以降だからである。

もっとも，〈全集〉の文字をもつ最初の近刊予告の広告は，実は1926年に四六判『解放』において最初の秋水特集を組む前から早くも出されている。この点はすでにみた。しかし全6巻からなる全体像を明示する全集広告の最初は，前述の通り1929年に入ってからである。その最初の広告は，黒表紙になる単独の全集のためのものではなく，雑誌および群書型の全集のためのものであった。

その後全集の広告は時とともに内容を変えていくが，当初の近刊予告は「『幸徳秋水全集』の完成」や「全集完成す」というもので（1929年7月号から繰り返し掲載される），次のような内容であった。

「苟も幸徳秋水の文章にして生前既に1冊の著書となって出版されたるものを除くの外は一言半句も之れを洩すことなく左記6巻に之れを全集す」

その6巻は次のように配列・広告されていた。

1．幸徳短文集　2．幸徳書簡集　3．幸徳評論集　4．幸徳文芸集

5．幸徳茶文集　6．幸徳激論集

同じ頃（1929年9月号からしばしば掲載される），解放群書に収録された群書全集のための広告では，まったく同じ内容の6巻でも，各巻の名称は次のように宣伝されている。

1．幸徳秋水名文集　2．幸徳秋水書簡集　3．幸徳秋水評論集

4．幸徳秋水文芸集　5．幸徳秋水茶説集　6．幸徳秋水主張集

もっとも，雑誌および群書の全集が，広告の通りこの段階ですでに完結していたわけではない。広告では最初から「全集完成す」とか「全集の完成」と宣伝されるが，『解放』で秋水特集が完結するのは，前述のとおり「幸徳全集完結号」とうたわれた1929年11月号の刊行のときである。すなわち全6巻完結の広告が出はじめる1929年に，それを受けるように『文芸集』と『茶説集』が全集6巻のうちの1冊の設定の下で『解放』の特集として刊行される。そして最後に先の「幸徳全集完結号」として『思想論集』が登場し，6巻揃いとなるのである。

従って雑誌および群書全集のいずれでも，実際の完結に「完成」広告が先行したことになるわけである。(6)

6　黒表紙全集刊行の決断と意義

以上のように幸徳秋水全集の広告にそって『解放』の秋水特集が6冊で完結するのは，1929年11月である。それは同時に雑誌および群書全集6冊の完成にもつながる。

そのうちの群書シリーズをみると，雑誌の一連の特集と同様に，たしかに当初は全集として企画されたものではあったが，ただ実際にも十分準備されて，かつその後も一貫して全集として出版され続けたわけではない。1929年に入ってはじめて，解放群書に収録された(7)，(8)，(32)，(36)，(37)，(38)の6冊をまとめて群書『幸徳秋水全集』とし，広告にも明確に6冊で揃いの全集という全体系を示すまでになる。そこにいたるまでの経過には，山崎のような筋金入りでも，幸徳秋水全集ともなれ

注（6）この広告と実際に「解放もの」で幸徳秋水特集が刊行される時期の前後関係については，若干の留保が必要である。というのは，『解放』の全貌が，現段階でもなお不明の点を多く残し，明らかになっているとはいえないからである。先に一連の『解放』における秋水特集の紹介の記述のところで，「判明したもののみ」を列記すると断わったのも，そのためである。

ば自己の主張や方針をふりかざしてまい進できなかった時代状況がよく反映されている。

ただしその場合も，群書全集の6冊が後の黒表紙全集のように表紙まで「全集」の衣をまとったかどうかは確認できない。つまり群書の(7)から(38)までにバラバラに散らされて収録された6冊を，新たな装いを特別に施すことなく，そのままただ揃えただけなのか，それとも一応表紙位取り替えて，全集の文字を刷りこんだのかどうかはわからない。私がこれまで手にした群書シリーズは，『解放』の表紙はとれて群書用の表紙にはなっているが，そこには「全集」の文字は入っていないからである（写真③を参照のこと）。

いずれにしろ，ここにいたって山崎としては一応の目的を達成したことになる。

しかるに，そこに到達してみると，山崎の反逆心はもう一歩先に進むべくうごめきだす。雑誌や群書の全集とは別個に，6巻の単独の全集，いうなればこれまでのようなつぎはぎや間に合わせ的な全集ではなく，全集として堂々と押しだせるものを作り上げる仕事への取り組みである。すでに当局の厳しい壁を突き抜けた既刊のものを使うので，表紙等でへまをやらないかぎり，発禁の心配はない上，『解放』や群書の在庫の整理にもなる。とりわけ単独の秋水全集ともなれば，秋水を処断した権力や支配階級に対する抵抗の意味も一層強くなる。権力嫌いの山崎にとってはむしろ権力への絶好の反逆・抵抗の機会にもなるのであった。

それにしても雑誌および群書を利用した全集は，全集というには余りに変則であった。通常の全集のイメージからは明らかにずれるものであった。もともとは各々どの巻も雑誌の特集号として出発していることもあって，秋水の著作のみで埋められていたのではなかった。このことが，まず普通ではなかった。それに当初から全集が構想されながらも，必ずしもきちんと全集らしい外観や内容をもってすすめられたのでもなかった。

ともかく，全集を出すぞ出すぞと，アドバルーンをあげて，当局の反応や読者の関心をさぐってみる。十分に準備ができていたわけではなく，まずは刊行自体が可能かどうか様子をうかがってみる。これが，当初の段階の姿勢であった。それだけに，時代の制約もあったが，かけ声ほどには，内容がともなうまでにはいたっていなかったのである。

その段階を超えて，内容も完全にではないが，秋水の論稿を中心に（6巻ともすべて秋水の論稿のみに整理されたわけではなかった），かつ表紙や奥付も全集らしい装いをもって登場させることになるのが，この山崎の決断による雑誌や群書から独立した全集の発行のときである。時期でいえば，雑誌および群書全集の最終号を出しおえた翌年の1930年に入ってからである。

ここに1930年4月を第1回配本として，まだ通例の全集に比べれば，異質ではあるが，ともかく全集らしい外見をそなえた『幸徳秋水全集』が世に送り出されることになる。いずれも既刊の雑誌・群書全集を使用し，それに表紙をはりかえ，製本をしなおしたものであった。それにしても，初めて表紙にも，また背にも幸徳伝次郎全集ないしは秋水幸徳伝次郎遺文全集の文字がうちだされた

こと，そして6巻全冊が共通の表紙をもつようになったことは，たんなる外見の変化にとどまるものではなかった。その変容こそ，前の二つの全集には見られなかった意味を創出し，初めての秋水全集といってもいいすぎではないほどの意義をそれに付与することにもなっている。

いうなれば，同じ全集でも，前の二つの全集は雑誌や群書といった他のシリーズを利用する借り物や付随物の感じをぬぐいさりえなかったのに対し，今度の黒表紙全集は，独立した装いをもつにいたったことで，これまでになく存在感も大きなものになった。それに応じて当局への抵抗の意味も，また秋水の同志や主義者に与える力も比べものにならないほど大きなものになった。この点にこそ，外見の変化以上の意味を黒表紙全集がもつにいたったことがうかがえるのである。

山崎としても，この黒表紙全集にはこれまでの2種の全集で抱いたものとは違う感慨をもって取り組んだはずである。それだけに力も入れた。それが端的に現れたのがこの外観であった。表紙は前述の通り白地に黒色が目立つ調子。広告では「美装」「特殊装丁」，やや大げさにすぎるが，「書斎の装飾用として」も利用できるとまで宣伝している。

ここで，表紙が黒中心であったことに注意をむけてみたい。まず黒色を使ったことで，権力のもっとも嫌うアナキズムの黒色の意味を潜ませて反逆の意志も内包させることになっている点が注目される。次にその黒表紙の中に秋水の顔写真を浮き彫りにしたことで，秋水たち大逆事件の犠牲者に対して弔いの気持を表わす意味をもたせている点が注目される。そして，それらの集合効果が，全集を手にするものにも特別の感慨にひたらせる力をもつことになっている。さらにもう一つ，その表紙に「天下第一　不孝の児」と刷り入れることで，一面でカムフラージュし，他面で逆説的に知る人ぞ知る秋水の母親への孝心の厚さを想起ないしは喚起させることにもなっている。

山崎は自らの刊行物を通して，繰り返しこの全集の宣伝を行う。とくに『解放』にはほぼ毎号広告を掲載する。アナキズム系機関誌にも広告はのるが，思ったほどは掲載されていない。むしろ稀にしか載っていないといった方がよいであろう。広告における各巻のタイトルと実際に公刊される各巻に付されたタイトルは若干異なるが，内容的にはまったく同一である。もっとも実際に刊行された全集そのものでも，全集名が広告と一致しないほか，表紙の表と背のタイトル，それらと中扉のタイトルも一致していない。この辺にもいかにも山崎らしい姿勢・やり方がうかがえる。

7　黒表紙全集の完結とその内容

以上のようにして，雑誌や群書とは独立した，外見からして全集らしい『幸徳秋水全集』が誕生する。この全集に関する広告が出はじめるのは，1930年に入ってからである。この点からも，山崎がこの企画に踏み出す決断をするのが雑誌および群書全集の完結した直後であるというこれまでの推測がほぼ裏付けられるであろう。

最初に出てくる広告は「予約出版　幸徳秋水遺文全集全6巻」というものであった。それをみると，予約締切りは1930年4月25日，「遅くも30日までに本社到着」。配本は「4月より毎月1巻宛巻順申込順に会員のみに配本」となっている。つまり，これまでとは違い予約出版に加えて，会員方式もとり入れている。ただ実際にも会員にしか頒布しなかったのかどうかは，不明である。ともかく広告では明快に「会員のみに配本」となっている。その広告でみる各巻のタイトル等は，次の通りであった。

(1)奇編（4月刊）　266頁

(2)想編（5月刊）　254頁

(3)芸編（6月刊）　200頁

(4)論編（7月刊）　244頁

(5)翰編（8月刊）　200頁

(6)珍編（9月刊）　165頁

かくして黒表紙全集の刊行となるが，第1回配本は予告通り4月であった。ただしその後は予告通りにはいかない。「巻順」はすぐに守られなくなるし，「毎月1巻宛」も守られない。とくに第4回と5回配本の間には10カ月もの間隔があく。最終的に完結するのは，翌1931年5月に入ってからである。

実際に世に送り出された全集各巻の刊行年月，タイトル，内容等はつぎの通りである。予約広告と比べて，タイトル名に違いのあるものもあるが，内容は広告通りである。この点は，前の二つの全集の場合とまったく同じである。

第1巻　奇文編　中扉は「幸徳いろは庵茶説集」となっている。263頁。1930年4月10日発行

第2巻　思想文編　中扉は「幸徳秋水思想論集」となっている。248頁（＋3頁）。1930年6月10日発行

第3巻　芸文編　中扉は「幸徳秋水文芸集」となっている。180頁。1930年5月10日発行

第4巻　論文編　中扉タイトルなし。244頁。1930年6月10日発行

第5巻　翰文編　中扉は「幸徳秋水書簡」となっている。166頁（ただし大石誠之助遺稿を含む）。1931年4月10日発行

第6巻　珍文集　中扉は解放群書(7)をそのまま使っているので，「幸徳秋水文集」となっている。165頁（＋目次6頁＋秋水前座31頁）。1931年5月10日発行。なお本巻は背表紙には6巻ではなく，誤植で5巻となっている。

以上に見る各巻のタイトル名がどうあれ，6巻ともすべて『解放』および解放群書の全集をもとにしているので，内容的には前の2種の全集と同一である。新しいものはないといってよい。

それに，この全集も，前の2種の全集と同様に秋水の残した著作全体からいえば，全集というよ

り著作集や選集の方があたっている。戦後の明治文献版と比較すると明らかなように，発禁をよびそうなもの，すでに発禁になったものは省かれている。『平民主義』『基督抹殺論』などが，序文等の収録にとどめ，主要部分が省かれているのは，そのためである。依然として取締まり当局の目が厳しく，秋水の著作を公刊するだけでも弾圧を覚悟しなくてはならない時代であれば，当然の配慮であろう。むしろ，このような著作集風のものであれ，刊行を実現しえたこと自体に大きな意味があったと考えるべきであろう。

なお，面白いことに，戦前における幸徳秋水全集の代表といってよい，この黒表紙全集を刊行しだしてからも，山崎たちは群書全集の方も広告・販売をつづける。また一連の「解放もの」の雑誌でも，全集刊行と併行して既刊の『解放』等で発表ずみの秋水特集の再刊もつづける。『解放』『解放科学』のほか，『解放パンフ』や『労農運動』のタイトルをもつ雑誌でも，すでに『解放』で特集した秋水号を表紙だけ替えて再刊することを続ける。このことは，すでにふれたが，いかにも独特の個性をもつ山崎ならではのやり方といってよいであろう。

ともあれ，山崎と解放社は，1926年の最初の特集から足かけ5年の歳月をかけて，『幸徳秋水全集』6巻を完成した。それに対する山崎たちの取り組みには，体系性や一貫性の欠如どころか，時代の制約を超えても，可能な道を追求し，最終目標を達成するという執念ともいうべきものが読み取れる。瓢ひょうとして，一見とぼけたような姿勢や生き方を示す山崎の外見からは容易に想像できない執念である。むしろ時代的背景を考えれば，秋水全集にこだわりつづけた執念からは，読者も胸を強く打たれるほどの一途さを感じとることができるであろう。

8 おわりに

1920年代から30年代にかけての時期，つまり丁度普通選挙法の制定から実施，さらに満州事変にいたる時期は，一方で大正デモクラシーのもっとも大きな目標の一つであった普通選挙制を実現するが，他方でその内実を見れば，国家視点に支配された明治の殻を打ち破るかにみえた大正デモクラシーとその時代を終焉に導く時期でもあった。普選のアメに対してムチの弾圧がとりわけ左派系に強くおおいかかることに象徴されるように，全体的にみればアメよりムチが凌駕していく時期であった。この間，アナキズム系も急速に後退の道をすすむ。とても幸徳秋水全集などを世に送り出せる状況ではなかった。このようなときに，不可能を可能にしたのが山崎今朝弥，そして岡陽之助や中川敏夫らの協力者たちであった。

前にも見たように，戦前にも秋水の著作の再刊を考えたものはいた。しかし実現にこぎつけることはできなかった。このような時代に，たとえ不十分な形にであれ，秋水を蘇らせることができるとすれば，山崎以外に人はいなかったといっても過言ではないだろう。現に，比較的よく知られて

いる改造文庫版の『幸徳秋水集』（1929年）にしても，山崎の協力をもってはじめて刊行されえたのであった。また改造社版「現代日本文学全集」の『社会文学集』（1930年）に「幸徳秋水集」を収録しえたのも，山崎の秋水全集への挑戦といった先導的な地ならしの活動があってはじめて可能となったものである。その意味では，山崎あってはじめて秋水全集は生をうけたのであり，彼なしには戦前に秋水全集や秋水集はついに日の目を見ることはなかったといってよい。秋水全集や秋水集の刊行に関しては，まさに余人をもってはかえがたい人物が山崎であった。

これまでの山崎研究でも，秋水研究でも，これらの戦前版の『幸徳秋水全集』は，まともにはふれられないできた。少なくとも山崎の役割に，この業績を加えることが必要であろう。これまでの山崎研究では，この点は十分に留意されることがなかった。また秋水研究でも，戦前版全集についてはこれまで正確な形では言及されることはなかった。(7) この全集を抜きにしては，秋水の日本社会主義史における位置を正しく理解することはできないだろう。山崎とその協力者たちが，一連の「解放もの」でしつこいほど繰り返し秋水特集を組んだのは，何も彼らがアナキズムという思想にこだわったわけではない。あくまでも，権力に抹殺された反権力の初期社会主義者である秋水にこだわったからにほかならないだろう。当時は，秋水の著作がなお日本社会主義者にとっては共有の財産とうけとめられていたこと，またその活動も日本社会主義史にとってはどの派にも共有される先駆的足跡であったことをうかがわせてくれる。

戦前版『幸徳秋水全集』が完結した頃は，経済恐慌が依然として深みにはまっており，満州事変も勃発する直前の時期であった。時代はどんどん逆行し，悪化していた。共産主義運動も，アナキズム運動も，弾圧の下で極度に後退を余儀なくされ，職場等での実践活動はもちろん，啓蒙的な出版活動さえ，困難に直面していた。山崎にとっては，弁護士としての活動ではますます多忙になる時代状況であった。彼は，普通選挙が実施された時代の下で，秋水が否定した議会活動にも力をいれだし，思想・行動面ではむしろ秋水とは距離をおきつつあった。それなのに，20年も遡る明治の末に思想に殉じた秋水を，昭和初期のこの混沌とした時代にも，山崎はなおも必要とし，その蘇生にこだわったのである。

このように明治人秋水を，明治の殻を破ろうとして，ついに果たせず，その中道においてまさに倒れかけていた大正デモクラシーの終焉期に，あえて蘇生させようとしたのである。この時期には，普通選挙制は形だけは与えられたが，その代償にアナキズムは片隅に押しやられ，共産党も繰り返す弾圧にさらされて，瀕死の状態にあった。この時代に，山崎は一方で議会主義に依拠して社会主義政党に関与・協力しながら，他方で逆行する時代への抗議の象徴として，支配階級がもっとも嫌

注（7） 前掲の大野みち代『幸徳秋水』は，この戦前版『幸徳秋水全集』について，『秋水伝次郎遺文集』として取り上げている。しかし秋水の著作に関する書誌学的研究が研究者の間でも遅れていた当時の状況を反映して，秋水書誌としてはもっともすぐれている同書も，一連の『解放』における秋水特集の記述とともに，この全集についても現時点でみるとやや不十分な形の紹介となっている。

うであろう秋水にこだわりつづけ，彼の全集を世に送り出すことをした。もちろん，それは，逆行する時代を阻止する力としては決して目立って役立つほどのものにはならなかった。しかし本格的に右傾化を強める時代状況の中で，その流れに抵抗する良心の表白をそこに読み取ることができるだろう。その抵抗は声を大にした派手なものではなかったが，意外にねばり強く腰の定まった性格のものであった。それだけに，現在でも思想や信条の相違を超えて共感を呼ぶものとなっている。

ともあれ，秋水やその周辺にも，近年少しずつ新しい光が照射されつつある。長い間に蓄積されてきた秋水にかんする理解や業績の中にも，洗い直され，再検討・再評価されるものも少なからずでている。本稿も，秋水を含む初期社会主義研究の取り組みに僅かであれ，益することがあれば幸いである。

（経済学部教授）